

協業とは？ —— 分業との違い

- アダム・スミスは『国富論』を何から説きおこしたか？
- 「分業」である。
- スミスは近代社会の経済的基礎を生産様式を分業とみたのである。
- マルクスは、資本主義の第一の基礎をなす生産様式は分業ではないという。
- では「資本主義的生産様式の基本形態」をなすものはないか？
- それは「協業」なのだ、というのである。
- 第11章の最後の文章を読んでみよう？
- 因みにマルクスは、資本主義的生産様式を何から説きおこしたのか？
- 「商品」である。
- スミスが「分業」(生産) → 市場 なのに対して
- マルクスは「商品」(市場) → 生産 となっている点はおもしろい。

『資本論』における定義規定

S.344

同じ生産過程において、あるいは、異なっているが関連している生産諸過程において、肩をならべ一緒に計画的に労働する多くの人々の労働の形態が、協業と呼ばれる。

「諸力の協同 (Concours de forces)」（デスチュト・ド・トラシ『意志および意志作用論』、80ページ）。

- Concours って、コンクール？ かなり、さり気ない定義。トラシといえば、イデオロギーという用語を最初に用いた思想家としてよく知られたあのトラシ、そのトラシまかせの...
- イギリスの division of labour に、フランスの Concours de forces を対置した感じ。
- 資本主義の基礎をなすのは、スミスのいう分業じゃなくて協業だ、っていいたいのなら、しっかりスミスを批判したらよいのだが、一言もこれにはふれていない。

現象としての協業

S.348-9

一定の場合に、結合労働日がこの増大した生産力をもつようになるのが、労働の力学的能力を高めるからであろうと、労働の空間的作用部面を拡大するからであろうと、生産の規模に比べて空間的生産場面をせばめるからであろうと、決定的瞬間に多くの労働をわずかの時間のあいだに流動させるからであろうと、個々人の競争心を刺激して彼らの生気を張りつめるからであろうと、多くの人々の同種の作業に連続性と多面性との刻印を押すからであろうと、異なる作業を同時に行なうからであろうと、共同使用によって生産諸手段を節約するからであろうと、個別的労働に社会的平均労働の性格を与えられるからであろうと—— いずれの場合にも、結合労働日の独特な生産力は、労働の社会的生産力または社会的労働の生産力である。

労働

— 協業と分業 —

「協業」とは？

- では、その「協業」とは何か？
- 協業は Kooperation (cooperation) の訳語で「協力」の意味。
- おそらく「分業」の対比で「協業」と訳されたのだろう。
- 協業という用語は、分業に比べて日本語として定着していないので、最近では「協働」などという人もいるが...
- 因みに「分業」というのは division of labour (Teilung der Arbeit) で、文字通り、労働の分割。
- それはともかく「協力」ってどういうことか。「協業」と「分業」とどう違うのか？

現象としての協業

S.348-9

結合労働日は、それと同じ大きさの、個々別々の個別的労働日の総和と比較すると、より大量の使用価値を生産し、それゆえ一定の有用効果を生産するのに必要な労働時間を減少させる。

現象としての協業

S.348-9

それは、協業そのものから生じる。労働者は、他の労働者たちとの計画的協力のなかで、彼の個人的諸制限を脱して、彼の類的能力を発展させる。

- いろいろな現象が例示されている。
- 何が協業の本質なのか。
- 労働者が集まることで自然に発生する効果
- 内部から形づくられる効果
- 一人一人バラバラにはたらいっていたのでは生みだせないか
- n 人の結合労働力 > 個人的労働 $\times n$ 人
- 集団力と競争心

集団力

S.345

騎兵一個中隊の攻撃力または歩兵一個連隊の防御力は、各騎兵および各歩兵によって個々別々に展開される攻撃力および防御力の合計とは本質的に違っているのであるが、それと同じように、個々別別の労働者の力の機械的な合計は、多数の働き手が、分割されていない同じ作業で同時に働く場合—たとえば、荷物を持ち上げたり、クランクを回したり、障害物を取りのぞいたりしなければならぬような場合—に展開される社会的機能とは、本質的に違っている。この場合、結合された労働の効果は、個々別々の労働によってはまったく生み出されないか、またははるかに長い時間をかけてようやく生み出されるか、もしくは小規模でしか生み出されないか、であろう。ここで問題なのは、協業による個別的生産力の増大だけではなくて、それ自体として**集団力**であるべき生産力の創造である。

9 / 113

競争心

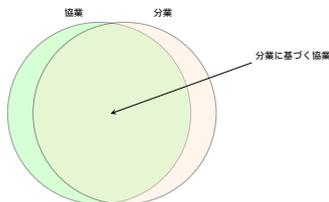
S.345-6

多くの力が一つの総力に融合することから生じる新しい力能は別としても、たいていの生産的諸労働の場合には、単なる社会的接触によって、生氣("動物精気")の独自の興奮と**競争心**が生み出され、それらが個々人の個別的作業能力を高めるのであって、その結果、12人が一緒になれば、144時間の同時的な〔共同の〕一労働日で提供する総生産物は、12人の個々別々の労働者が各自12時間ずつ労働するよりも、または1人の労働者が12日間続けて労働するよりも、はるかに大きい。このことは、人間は生まれながらにして、アリストテレスが考えるように政治的動物ではないとしても、とにかく社会的動物であるということに由来している。

10 / 113

協業と分業の関係

- 「協業」と「分業」の原理的な区別はまだまだ不完全...
- こんな状態では教えることはできないので、教科書では...
- 協業と分業を区別する原理を明らかにし
- 現実の労働組織は両面合わせもった「分業に基づく協業」だと説明している。



- 詳しいことは『経済原論 — 基礎と演習 —』にまかすとして、協業のポイントは

11 / 113

資本の力

- 資本は賃金労働者を買集めることができる。
- 集団力はだれのものになるのか。
- 資本がバラバラの独立の生産者に勝てるのは、この社会的力を個別の力として利用できるから。
- だから「資本主義的生産様式の基本形態」は「協業」ということになる。

12 / 113

指揮監督

S.351-2

資本家の指揮は、内容から見れば二面的である — それは、指揮される生産過程そのものが、一面では生産物の生産のための社会的労働過程であり、他面では資本の価値増殖過程であるという二面性をそなえているためである—とすれば、形式から見れば専制的である。協大規模に発展するにつれて、この専制は、それ独自の諸形態を發展させる。……封建時代に戦争および裁判におけ当司令が土地所有に固有なつきものであったように、産業における指令は、資本に固有なつきものになる。

- 「一面では」「他面では」というが、「指揮監督」は集団力の形成にとって不可欠か？
- あらゆる社会にみられる指揮監督と、資本主義に特有の指揮監督がある、というのはちょっと優等生的...

13 / 113

指揮監督

- 『資本論』の指揮監督論には、「指揮監督が不可欠だ」"資本家はこの指揮監督を通じて集団力を我がものとする"と見なす傾向が強い。
- 集団力は、第一に労働者間の関係として生みだされる。内生的。
- 労働者を買集めれば発生する。資本の力は、多数の労働者を集める力が根本。
- プラス 指揮監督や生産過程の設計・調整など。
- 外部から指揮監督しないと集団力は生まれぬ、と見なす立場は、社会主義になっても計画の優先、テクノラートによる指揮監督を重視する結果になったのではないか？
- 搾取論のコアをなすのは、集団力をだれが我がものとするのか、集団力を形成する主導権・決定権をめぐる対抗関係ではないのか？

14 / 113

まとめ

- 『資本論』の「労働過程」では、労働の本質を合目的活動と規定した。この点は重要。
- 「構想と実行の分離」の可能性 他主体の設定した目的を自分の目的として受けとめて実行できる能力 集団力はまず内部から自然に生まれる
- 『資本論』では、この側面が隠れてしまっている。そのワケは....
- 『資本論』の表の論理：商品経済の等価交換のルールにしたがって、個別労働者から剰余価値が搾取される。市場を残して搾取を廃絶することはできない。社会主義の基本は、市場の廃絶、計画経済である。
- 指揮監督労働の不可欠性 計画経済のもとで指揮監督権を握る官僚
- 20世紀の「社会主義」を原理的に支えてきた『資本論』の読み方を見なおしてみよう。

15 / 113